

京都の旧社家町に関する研究

ー 下鴨神社周辺地域を中心として ー

Keywords

社家 旧鴨脚家 上賀茂社家町
下鴨神社 梅辻家 指図



AK15094 宮田 周

1. はじめに

1.1 研究背景・目的

社家とは、ある神社に世襲的に奉仕する神職家のことであり、彼らの住宅をも指す。近代京都における歴史的風致を現代に残す町並みとして、全国の重要伝統的建造物群保存地区の中で唯一社家町として登録されている上賀茂地域（京都市北区上賀茂藤の木町あたり）がある（写真1）。その南方に存在する、下鴨神社周辺地域（下鴨地域）は元々室町時代から続く社家町であったが、明治時代の政府による社家の世襲制度の廃止により社家が相次いで職から撤退したり、土地区画整理事業による立ち退きを余儀なくされたために衰退の一途をたどった。下鴨地域に現存する社家住宅は旧浅田家住宅（写真3）と鴨脚（いちょう）家住宅のみで、ほかは現代住宅にとって代わってしまった。旧浅田家は3年前の保存活動により資料館として利用されているが、地域としては“社家町”として認識できるような景観形態はほとんど残っていない。一方、上賀茂地域においては景観の保存により文献や写真等による紹介が豊富であり、社家住宅の意匠に関しては先行研究や調査が進んでいる。下鴨地域の社家住宅やその町並みの歴史はほとんど表に出ることはなくなっているため、本研究では旧浅田家住宅や鴨脚家を含んだ下鴨地域の近代の町並みの変遷の考察、ならびに上賀茂社家との比較等により、同地域の特質を建築史・都市史の観点から見出すことを目的とした。

1.2 研究方法

1.2.1 既往研究、文献調査

京都の社家町・社家住宅を扱った文献や研究として主に以下を参照する。

- ① 「京都の社家と民家型式の関係についての試論」
丸山俊明 日本建築学会計画系論文集 第79巻 第695号 pp191-196 2014年
- ② 「近世末期下鴨神社における社家町を含む周辺地域の構成」辻晶子・大場修 2010年 日本建築学会近畿支部報告集
- ③ 『上賀茂の町なみ』京都都市計画局 1978年
- ④ 『鴨社古絵展目録』財団法人糺の森顕彰会 1985年
その他同地域の景観に関する先行研究も参照する。

1.2.2 現地調査

京都府立京都学・歴彩館（旧京都府立総合資料館）所蔵の上賀茂下鴨両地域に関する古文書または行政文書を閲覧・複製し解読や考察を行う。さらに古絵図や都市計画図（明治～昭和戦前付近）を入手し、当時の開発の過程を把握する。また、鴨脚家の文書の閲覧・解読も試みる。調査日時：2018年8月22日,9月3～5,24,25日,11月5,6日,12月5,6日

2. 京都における社家町について

2.1 上賀茂の社家住宅及び町並み

主な先行研究としては昭和52年（1977）に、西川幸治・谷直樹らが上賀茂神社の社家32棟を調査し、『上賀茂町なみ調査』報告書がある。（1.2.1-③）

上賀茂神社（賀茂別雷神社）の東、明神川の周辺に、代々神職を務めた賀茂氏由来の社家住宅の屋敷が立ち並ぶ。現在の社家町の基礎は室町時代ごろに形成され、江戸時代には300軒ほどあったといわれるが、明治時代に神職の世襲制度が廃止になり、多くの方が職を離れ、現在も住宅の遺構は30軒ほどあるが、実際に住んでいる社家は一部しかいない。多くの家には池があり、目の前の明神川から水を引いて利用したのち再び川に戻していた。さらには生活用水として引いた水を利用し、洗濯や食材を洗うのに使われていた。また、社家住宅には「神様を見下ろしてはいけない」と平屋が原則で、瓦葺のなだら



かな大屋根をもち、「束貫」「冢叔首（いのこさす）」の2種類の妻飾りがあり、鳥居形の内玄関と高貴な客を出迎える式台が並ぶ意匠となっている。

写真1 上賀茂社家住宅の町並み

2.2 下鴨地域の沿革

下鴨地域とは、京都市左京区の下鴨神社の西側、賀茂側と高野川に挟まれた範囲である。本研究で扱う対象地域は、下鴨宮河町、下鴨森本町、下鴨松原町、下鴨西林町、下鴨宮崎町、下鴨泉川町から構成されている。同地

域は大正7年（1918）に京都市に編入されるまで、愛宕（おたぎ）群下鴨村に属していた。かつて、下鴨神社には江戸時代に50軒ほどの社家があり、応仁の乱のときに下鴨神社の西（松原町、森本町、西林町付近）に社家町が形成された。明治維新後、下鴨神社の境内は国に返上され、一部は神社に戻されたものの、多くは官有地となったり、民間に払い下げられたりした。大正時代になると京都市の人口増加と市街地拡大に伴い、村でも宅地化が進み人口が急増する。その後京都市の都市計画事業により複雑な地割の農地が整然とした住宅街へと変容した。昭和7年（1932）頃、下鴨土地区画整理組合により下鴨本通りの工事・拡幅が行われ、地域の景観は大きく変貌した。なお、疏水分線より北側の本通りは昭和5年に完成した。



写真2 下鴨本通り 昭和5年

下鴨地域内に現存する2つの社家住宅の遺構のうちの1つの浅田家は、下鴨神社にあった学術研究機関学問所に所属し、祭事などを記録する“絵所”の絵師を務めていた。平成27年11月、住宅の整備ののち資料館（秀穂舎）として公開された。整備計画では、木造2階建て延べ約340㎡のうち、応接室や座敷など延べ約120㎡を保存し、残りは解体撤去された。秀穂舎とは、江戸時代後期に、



本宮の正祝を務めた鴨秀豊（1756～1837）が開いた私塾の名前で、公家や神職の子供だけでなく、京の町衆の子供達にも門戸を開いた学舎であった。

写真3 旧浅田家住宅(秀穂舎)

2.3 下鴨旧社家町の史料について

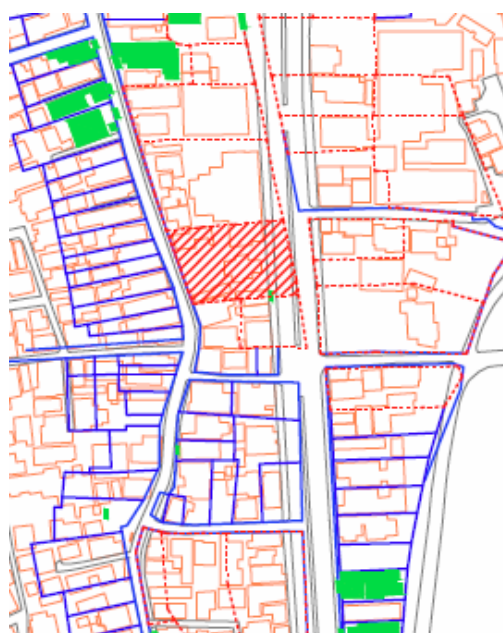
下鴨地域の幕末から近代の昭和時代初期において作成された地図で研究に使用した史料は以下の通り。

表1 研究で主に使用した地図と年代

・旧大絵図(展示目録より)	江戸時代
・社寺領上知令一部返還図	明治6年
・仮製地形図(1/20000)	明治25年
・京都市都市計画基本図(1/3000)	大正11年
・京都市明細図(1/1200)	昭和2年
・京都市明細図(1/1200)	昭和26年

3. 旧鴨脚家について

京都学・歴彩館（旧京都府立総合資料館）所蔵の古文書のうち、鴨脚家に関する史料（史料名：某屋敷指図）を現地調査で入手した。間口割、敷地の形から旧大絵図より、江戸時代の屋敷の当主は“鴨脚秀静卿”と推測できる。現在の位置では下鴨本通り沿いに面していて、間口割も改変されておりマンションが建ち当時の面影は残していない。以下の図3ならびに図6は、現在の下鴨地域の地図上に、旧大絵図に記された敷地図を改めて作図し重ね合わせて表現した図である（正確なデータは先行論文より引用）。図3の斜線部分の敷地が今回研究した鴨脚家の敷地で



あり、現存する鴨脚家とは別の家である。図上の点線部分は江戸時代の社家住宅の敷地で、当時は現在の下鴨本通り沿い付近に集中していた。

図3 旧鴨脚家を中心とした周辺の下鴨地域地図

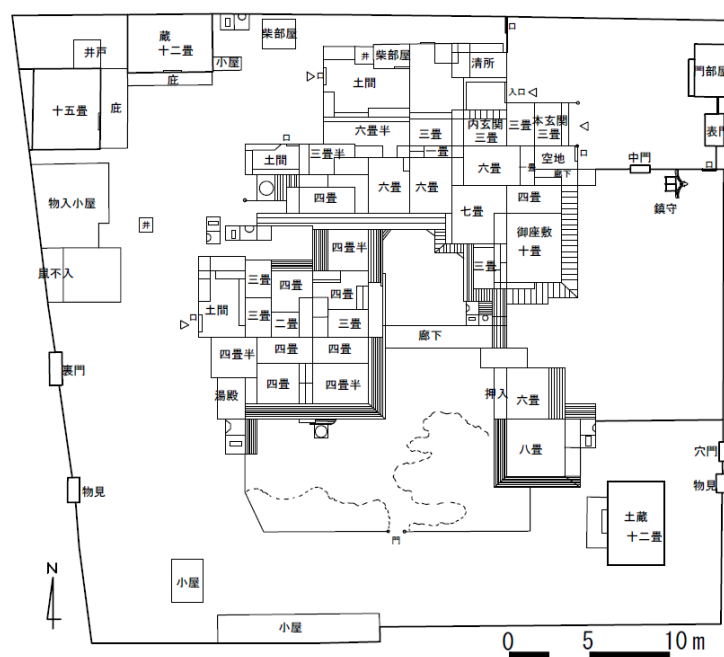


図4 旧鴨脚家平面図

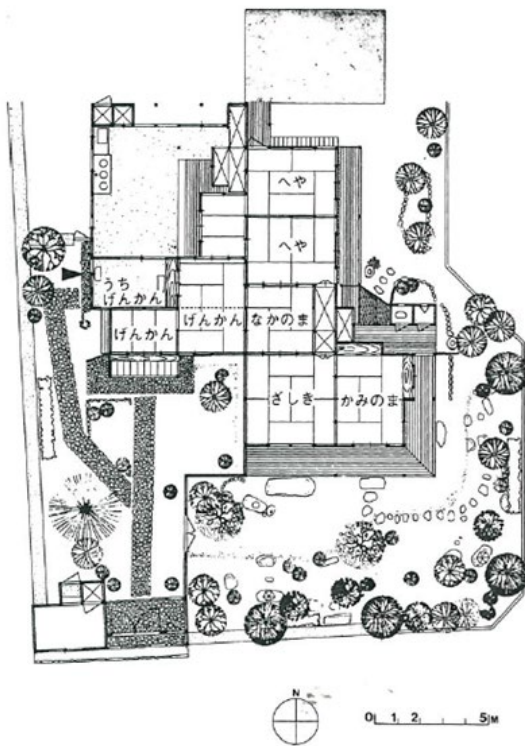


図5 梅辻家(上賀茂社家)平面図

図4の平面図は鴨脚家文書の中にあった「某屋敷指図」という史料名の指図を、リライトしたものである。指図中に増築した痕跡が見られ、上賀茂社家住宅の特徴とはまず異なる。敷地は500坪を超えるものでこれも上賀茂にはない大きさである。表玄関から入って南側の動線を抜けると四畳の次の間と十畳の御座敷が連なっている。御座敷は違棚、床と書院が設けられている数寄屋風の居室で屋敷の中では最も格が高い空間である。北側に土間を持ちそこから南に向かって接客空間とは異なる家庭空間が広がるが、上賀茂の梅辻家と比較してもその複雑さが見える。特に居室が細かく分かれていて主屋部分がさらに南側に張り出している点は、上賀茂の町なみ報告書で調査されたどの建物にもない特徴である。おそらくは年代ごとに増築を行ってこのような全体像になったと思われる。正確な用途は不明だが、庭に面した縁部分が屋敷中に3つ存在する点や、上賀茂社家居室の基本類型「2列4室、6室型」を成していない点は、下鴨社家には違った類型あるいは意匠性が存在していた可能性を認められるだろう。

4. 現在の下鴨神社周辺の景観

4.1 現代住宅の“社家的特徴”について

下鴨地域には上賀茂地域にあるような平屋建ての社家住宅は全く現存していないが、景観の雰囲気として社家住宅を思わせるような意匠が施されている住宅が、下鴨神社周辺に存在していることが現地調査で分かった。本論では、“社家的特徴”を次の2つの事項として決め類型

をまとめようと試みた。①瓦葺の和風住宅②比較的高い塀とそれに伴う棟門。特に棟門は、上賀茂の社家住宅の特徴としても挙げられる、切妻屋根で切り破風造の瓦葺門である。また、現代風に瓦葺部分がスレート葺にアレンジされているものもいくつか存在していた。



写真3 現代住宅に付属する棟門

4.2 “社家的特徴”の分布

前節での2つの特徴をもつ住宅を、本研究での対象地域である4町において調査し、下鴨地域の地図上にプロットし分布を確認した。以下はその図である。薄い実線で表している現在の建築物を、塗りつぶしている箇所が“現代風の”社家的特徴をもつ住宅である。

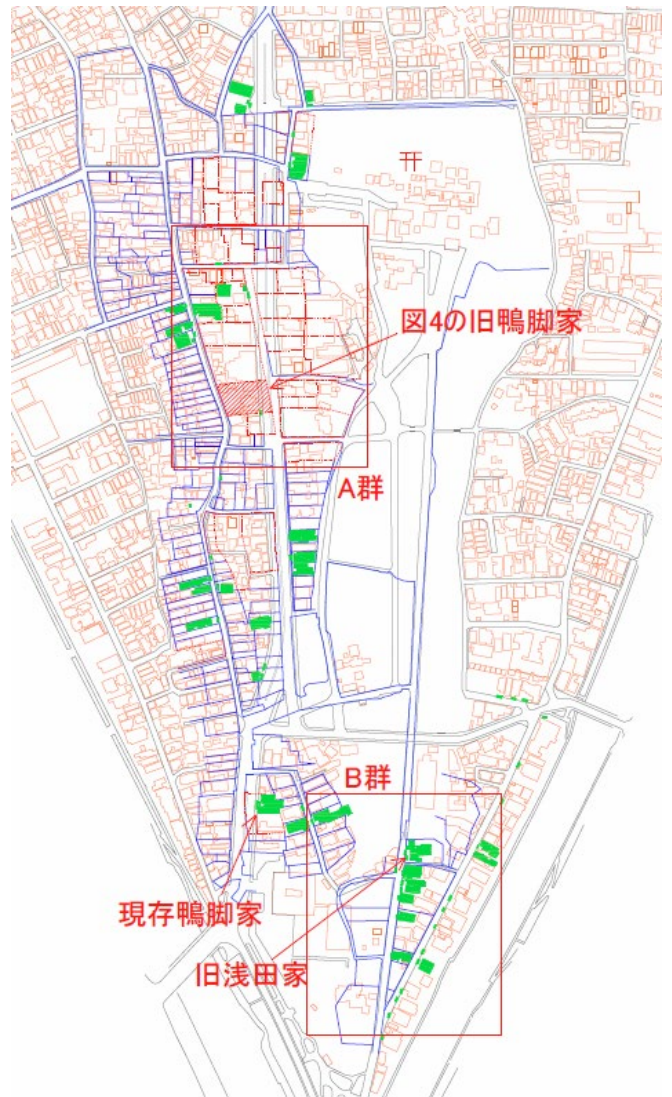


図6 社家的特徴をもつ住宅の分布

元々社家住宅が存在していた場所(図の点線部分)上にはさほど社家的特徴を引き継ぐ住宅はなく、反対に神社の南側参道付近を中心に、元は農家であった場所(図

の実線部)に比較的分布している。元の住宅の格というものほとんど反映しておらず、戦後に住宅・土地を所有した当主らの手によって自由に新築・改築された影響といってよいだろう。また、社家住宅が分布していたゾーンは現在、下鴨本通りに面しているため用途地域的には商業地域であるから、住宅としての用途は少ないという見方もある。

5. 明治期からの都市計画事業に関して

主に下鴨神社の南側に多く分布している、近代的な“社家的特徴”をもった住宅は戦後の昭和期から平成の初頭に建築されたものがほとんどであるが、今のような景観を作る要因、また元社家住宅が存在していたゾーンは大きく景観的にも改変されてしまった要因は、都市計画的事業によって引き起こされてきたと、都市形成史の観点からは捉えることができるだろう。前述の2つのゾーン(元社家住宅群、元農家群)をA群、B群(図6参照)と置き、下鴨地域の都市計画事業が大規模に行われた大正期以降からの地図を遡り考察した。

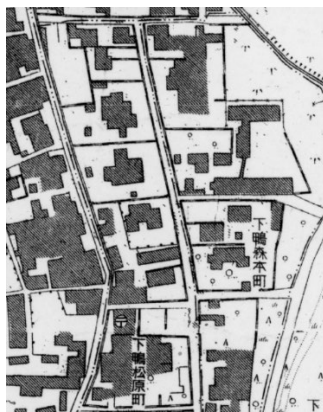


図7 A群大正11年地図



図8 A群昭和28年地図

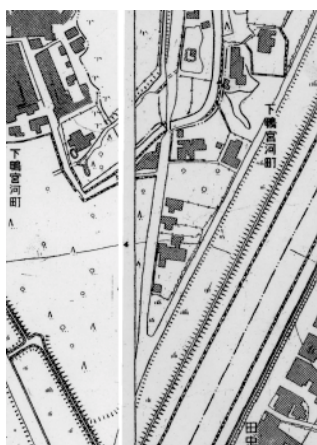


図9 B群同上年地図

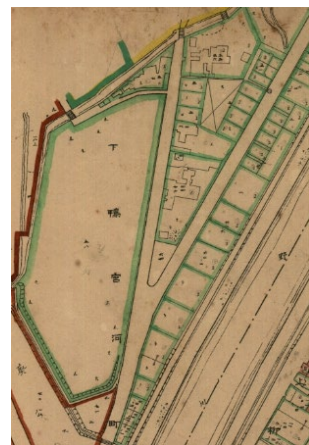


図10 B群同上年地図

図8,10は大正期からの都市計画事業に合わせて昭和26年まで加筆を加えたものである。(火災保険協会京都地方会作成)。社家住宅のあった場所に南北の下鴨本通りが大正10年ごろから、土地区画整理事業として計画され道路の拡幅・整理が行われた。当時の京都市長ならびに都

市計画局の人らは、京都という都市の近代化を推し進めるために利便性の追求を図った。すなわち、歴史の継承性より人々の移動を円滑にしなおかつ人口増加のための政策に重きを置いたのだ。計画初期の段階で、A群の辺りの住民らによる土地区画整理事業の反対の署名運動が起こったが、下鴨神社への観光客らの誘致の名のもと、利便性の促進により屈してしまう。一方B群においては、上賀茂地域同様に大規模な土地区画整理事業の対象敷地外であったため、緩やかな宅地化という発展の軌跡をたどった。元々扇状地であった高野川沿いも埋め立てられ、平坦な土地であるから間口の広い住宅が建ち並ぶようになり、塀も各家庭に建てられる形式となったと推察した。A群は大きな開発のもとに区画を大きく改変され、代々住んでいた住人の立ち退きが顕著であったため、人々の心理的にも景観の継承にはつながりにくかったのではないかと推察される。

6. 総括

(1) 下鴨の社家住宅について(鴨脚家平面図)

今研究で発見した鴨脚家文書の中の鴨脚家の屋敷指図は、建物の修理や増築を行う際に記された図であり、基本的に増築を行わない上賀茂の社家住宅とは異なる更新性を持った住宅であると同時に、平面構成の複雑さ・大きさに至っては上賀茂町なみ報告書に載った社家には類を見ないものであることが分かった。上賀茂社家住宅のいくつかの社家的特徴は、この平面図で随所に確認できるが居室の平面形式の類型(2列4室、6室型)の基本をなしていないため、他の社家の敷地面積から類推すると、下鴨地域には独特の類型または自由さがありそういった社家住宅が並んでいた可能性はある。

(2) 下鴨地域の都市変遷について

本論で示した、本来の社家町が集中していたA群は、大正時代からの土地区画整理事業の道路拡張などで大規模な土地の分割、建築物の更新を余儀なくされ特徴を失ってしまい面影を残していない。一方B群では、鴨脚家の中の一軒が現存し、神社南側の参道では旧浅田家を含んで現代風な社家的特徴を模した住宅が、社家町のような雰囲気を残している。それとともにかつては参道農家であった家々の外構に棟門が設けられ、近代の「下鴨神社参道」ともいえる景観を形成していて、明治以降の近代から作られた社家的空間であるだろう。

参考文献

- 1) 中村昌生「上賀茂の社家」『京都府の民家調査報告,第6冊,昭和44年度京都市内町家調査報告書』pp70-80,京都府教育委員会,1970年
- 2) 財団法人紅の森顕彰会『鴨社古絵図展目録』1985年
- 3) 京都市都市計画局『上賀茂の町なみ』1978年
- 4) 辻晶子・大場修「近世末期下鴨神社における社家町を含む周辺地域の構成」,平成22年度日本建築学会建機支部研究報告集,2010年